新規就農者の横顔 129

弁当店で培ったノウハウを トマト栽培に生かす

～香田農園 代表 香田 文雄さん（平取町）

平成14年に新規参入した香田文雄さん。㈶北海道農業開発公社が行う新規就農優良農業経営表彰式で優秀賞を受賞している

″諦める。どうせできない″は嫌い

道内一の作付面積・収穫量を誇る平取町のトマト。「ニシパの恋人」のブランド名で販売されるトマトを生産する「平取町野菜生産振興会トマト・胡瓜部会」に加わり、トマトの収穫に汗を流すのは、平成14年に新規参入した香田文雄さん(47歳)。

大阪市出身の香田さんは、市内にある3つの弁当店の店長を任されていた。奥さんの理世さんとの間には長男・剛さんと長女・智美さんが誕生し、店舗は順調に売り上げが伸び3LDKの一戸建てを購入。しかし、朝5時から夜の1時まで仕事をする毎日が続いた香田さんは、子どもたちの寝顔しか見たことがなかった。

″このままの人生で良いんだろうか。家族ってなんだろう″と香田さんは考えたという。また、トマト、レタス、キャベツなどを仕入れるときに、この野菜はどこで、どのように作られているのかが気になり、農業に関心を持つようになった。

次男の大輝くんが生まれた平成11年に、香田夫妻は大阪市内で行われた旧・道農業担い手育成センターの新規就農相談会へ行き平取町のブースに立ち寄った。平取町の説明を受けた香田さんは、″道内トップクラスのトマトの生産能力と品質を持つ平取町だったらやっていける″と確信したという。

「ブースで説明してくれた役場の方から、『就農時は収入が少ないので、貯金を生活費に充てることになる。就農資金として500万円を用意してほしい』と言われました。住宅を買ったばかりでお金がなかったのですが、農業がやりたかったので研修の申し込みをしました。結果は″自己資金が少ないので、今回の受け入れを見送りたい″という書類が届いたのです。しかし、自分が平取にどれくらいの思いがあるのか、農業にどんな夢を描いているのかなどを綴った手紙やはがきを役場、農協、組合長へ何度も送りました。関係機関は年末に、多少お金がなくても農業に情熱を持っている人を採用するという考えになり、翌年から研修を始めることができました。私は″諦める。どうせできない″という言葉が嫌いなんです。できないんだったらできるようにする。条件が合わないんだったら合うようにするという考えでやって来ました」

平成12年に香田夫妻は、JA平取町組合長の仲山浩さん（北海道指導農業士）で実習を重ね、翌13年、14年の2カ年に「紫雲古津実践農場」でトマト・キュウリの研修を実施。その間、道立農業大学校で「経営管理研修」「機械研修」も受講するなど着々と研修を重ね、14年末に1・1haの農地を取得し、町からの「就農促進対策事業」の助成を受けて営農がスタートした。

今年、長男・剛さん、長女・智美さんが加わり農場は賑やかになった（左から香田さん、智美さん、剛さん、奥さんの理世さん）

初めての人でも作業ができるシステムづくり

現在、香田農園ではハウス11棟（3300坪）でトマトやキュウリを栽培し、香田夫妻、剛さん、智美さん、パート2人、研修生が働く。研修などで学んだトマト栽培技術を実践してきた香田夫妻は、Yes!cleanに認証されている。また、香田農園のハウスには、ハウス裾の開閉量を示すためにパイプに赤、青、黄色のテープが貼ってある。香田さんが出かけていても、携帯電話で裾の開閉をパートさんに指示できる仕組みになっている。さらにピッチ計のアラームのタイミングに合わせて苗の灌水をしているため、一鉢一鉢の灌水量が一定なので生育にむらがない。パートさんが初めて農園で働き始めても、すぐに農作業ができるシステムづくりとレベルアップを香田さんは心がけているという。

「これは弁当屋で学んだことなんです。1日目のアルバイトが作った商品も、3年以上働いたベテランも値段は一緒。ベテランだろうが初心者だろうが、ハウスの中のトマトにとっては関係ありませんから、誰でも同じ作業ができる仕組みにしました。また、パートさんには良い環境で、楽しく仕事をしてもらうために、作業改善の提案があればすぐに取り入れるようにしてきました。作業効率が上がる、良質なトマトができる、それが香田農園で働くスタッフの目標になっているんですよ」

平成17年に香田さんは町内にいる新規就農者の交流組織「新芽会」を立ち上げた。また、奥さんの理世さんと長女の智美さんは町の「よさこいソーラン」チームに参加し、夫婦ともに地域に溶け込んでいる。

「名刺には『アグリクリエイター』と印し、新しい農業を創意工夫しながらやっていきたいという思いを込めています。今年から長男・長女が農場に加わりましたが、新規参入された人たちの労働不足を補うために2人を香田農園独自のトマトヘルパーとして派遣しています。子どもたちには他の農場で働きながらコミュニケーション能力や栽培技術を磨いてほしいですね」と汗をぬぐいながら長男の剛さんがトマトを収穫する姿に、香田さんは目を細めていた。

〈編集部／竹津　明〉

今年から香田農園で働き出した剛さん。トマトの収穫に汗を流していた

香田農園独自のトマトヘルパーとして近隣の新規参入した農家へ向かう長女の智美さん

パートさんが初めて働き始めてもすぐに農作業ができるシステムづくりとレベルアップを図る香田農園

農作業の打ち合わせをする香田さんと奥さんの理世さん